

『なぜ日本の教育は迷走するのか (ブラック化する教育 2019-2022)』

大内裕和・内田良 [ほか] 対話 青土社



本館	請求記号： K/372/O91/2019-2022	資料ID：111377982
Knowledge Base	請求記号： /372/O91/2019-2022	資料ID：111487617

経営学部准教授 福山 文子

日本の教育って「迷走」していない！？と感じているアナタ、是非手に取ってください。

教育をめぐる様々な課題には、現場の努力や工夫だけではどうにもならないものがあります。「教育課題」の多くが、「労働課題」や「社会課題」だからです。この本はそのような教育課題について、筆者の大内氏が対話を通して、様々な分野の専門家と共に考えていく本です。例えば「第1章麻痺する教育現場から問い直す」では、大内氏と「現場は教育改革を欲望しない」等の論考で注目されている岡崎勝氏、そして教育労働や校則等に関わり多くの著書がある内田良氏の3人が討議を繰り広げます。テーマは部活動に関する問題、教員の働き方の問題などです。

続く各章においても、教育の市場化・民営化を進める新自由主義改革との関係性のなかで、教育課題がもつれ複雑化してしまった現実が示されます。このように、教育の自由化路線の罪深さが改めて示されつつも、同時に「迷走」の要因が「こちら側」にも潜んでいることに気づかせるところが、この本のコワイ(?)ところ です。

筆者は、「『資本蓄積』の公理が教育の領域にまで貫徹し、教育システムがそれに従属している状況からいかに脱却していくかが『これからの教育』を考える際の必須の課題である」(p.62)と述べています。「迷走」が何によってもたらされているのか気づいた上で、どこからどのように一步を踏み出せばいいのか、一緒に考えていきませんか。